

## 入院患者に対する離床認知度の調査報告

川瀬和大\*

\*大阪府済生会茨木病院

### 【はじめに】

近年、術後のケアやリハビリテーションにおいて、医療従事者に離床は周知され、入院後早期から座位や立位といった早期離床が行われている。

早期離床の効果は目覚ましく、入院期間の短縮、せん妄の予防、QOL (Quality of life : 生活の質) の改善など多岐にわたり、ここ数年で離床は「行った方が良いもの」から「行わなければならないもの」へと変化している<sup>1)</sup>。

医療従事者にとって当たり前となった離床はあるが、患者には聞きなれた言葉ではなく、患者の中には離床を拒否されることも散見する。離床は医療従事者だけでなく、患者の理解と協力が基本として必要になるため、われわれ医療従事者が患者に対し離床を行う際は、その言葉と意義を説明し、同意を得ることから始まことが多い。

離床の拒否が散見される理由として、患者において離床の認知度が低いことが関与していると推測される。

しかし、これまで我が国において、患者を対象として離床の認知度を調査した報告は見当たらない。

そこで、離床という言葉が患者にどの程度認知されているかを明らかにすることを目的に調査を実施した。

### 【対象と方法】

対象は、2017年4月にA病院に入院し、リハビリテーション科へ依頼があった認知症のない患者15名(平均年齢69.2±16.7歳、男性9名、女性6名、心不全1名、圧迫骨折1名、糖尿病3名、尿路感染1名、腰椎椎間板ヘルニア2名、脳出血1名、膝蓋骨骨折1名、脳梗塞1名、腰椎すべり症1名、踵骨骨髄炎1名、脛骨骨幹部骨折1名、大腿骨頸部骨折1名)とした。

方法は質問紙法とし、リハビリテーション介

入初日に担当療法士が患者に初回問診を行う際にアンケート調査を実施した。設問は「離床という言葉を聞いたことがあるか」という設問を設定し、「ある」「ない」から1つ選択とした。また、「ある」と答えた場合は「離床という言葉をどこで聞いたか」、「離床は具体的にどのようなことを行うか」、「離床は誰が行うか」という設問を設定し、自由記述とした。

「離床という言葉を聞いたことがあるか」という設問に対しては、回答結果を百分率で表示した。

また、今回のアンケート調査は、人を対象とする医学系研究に関する倫理指針に基づき、患者の同意を得て行った。

### 【結果】

アンケートは回収率100%、有効回答率100%であった。

離床という言葉を聞いたことが「ある」と回答したものが1名(7%)、「ない」と回答したものが14名(93%)であった。(図1) また、自由記述は、離床という言葉をどこで聞いたかという設問に対し、「小説で見た」、離床は具体的にどのようなことを行うかという設問に対し、

「病気から回復して、布団から離れていく」、離床は誰が行うものだと思いますかという設問に対し、「当人及び関わりのある人達」という回答が得られた。(表1)

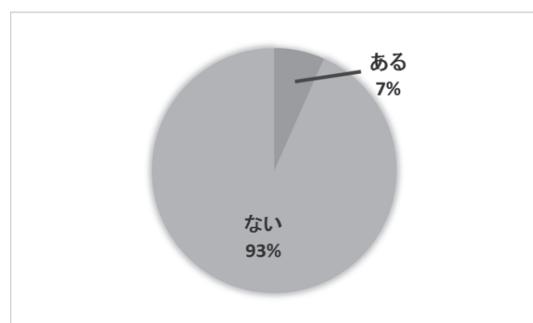


図1：離床という言葉を聞いたことがあるか

設問	回答
離床という言葉をきいたことがあるか	小説でみた
離床は具体的にどのようなことを行うか	病期から回復して、布団から離れていく
離床は誰が行うものだと思いますか	当人及び関わりのある人達

表1：自由記述の結果

## 【考察】

今回、離床という言葉が患者にどの程度認知されているかを明らかにすることを目的にアンケート調査を実施した。アンケート調査を行い、「離床」という言葉の認知度は7%と低いとうことが明らかとなった。

熊坂ら<sup>2)</sup>は、心臓リハビリテーションの認知度に関して、一般人、虚血性心疾患患者とともに「脳卒中リハ」の74%に比べ、「心リハ」の認知度は7%と極めて低く、その理由として心リハの歴史が浅いこと、社会全体に運動習慣が健康維持に重要という概念が浸透していないことなどが挙げられると報告している。また、宇野ら<sup>3)</sup>は「COPD」の認知度は9.3%と低く、その理由として「病名から疾患概念がイメージできないこと」などを挙げている。

「離床」の認知度も「心リハ」の認知度同様、低いという結果となった。この理由として、「離床」という言葉そのものが浸透していないことが考えられた。また、言葉が浸透していない理由としては、離床がどのような職種が、具体的にどのようなことを行うのかといったイメージできていないためだと考える。

離床は医療従事者だけでは成り立たず、患者の理解と協力が基本として必要である。離床という言葉の周知、離床とはどのような職種が、具体的にどのようなことを行うのかというイメージを持ってもらうための啓発を行う事で、「離床」を患者に意識づけすることが必要と考えられた。さらに、意識づけをすることにより、離床の際に患者の理解と協力が得られ、よりスムーズに離床が進むと考える。

なお、今回のアンケート調査には何点か課題がある。1点目は、限られた研究期間のため、十分な症例数が確保できなかった。2点目は、対象疾患に脳血管障害が含まれており、この患者に対して高次脳機能障害の有無などを精査しておらず、正確な回答が得られたか疑問が残ることが挙げられる。3点目は対象疾患が幅広く、疾患の種類により離床という言葉の認知度に与える影響を考慮できなかつたために、診療科別に対象疾患を絞って調査することで「離床」の認知度も変化する可能性があることが挙げられる。4点目はアンケート結果に影響すると考えられる回答者の入院歴やリハビリテーション歴の有無について調査を行わなかった。今後の調査時にはこれらの事項についても検討する必要がある。

今後は、「離床」という言葉を知っている方はどのような方が多いのかといったことを調査することで、離床認知度に影響する要因や、離床とはどのような時期にどの程度行うものなのかということを調査し、医療従事者と患者の離床に対する意識のズレについて検討を重ねていきたい。

## 【まとめ】

患者におけるアンケート調査の結果、「離床」の認知度は低いことが明らかになった。この研究を行うことで、離床という言葉や意味を患者目線で捉えなおし、患者への啓発活動等での患者教育の一助にし、よりスムーズな離床へとつなげたい。

## 文献

- 1) 葛川元：これまでの10年これからの10年離床の流れから将来像を考える。早期離床。2, 6-9, 2016
- 2) 熊坂礼音, 大宮一人, 長山雅俊, 他:心臓リハビリテーションの認知度に関する一般人・虚血性心疾患患者対象大規模認知度調査。心臓リハビリテーション。22, 170-183, 2016
- 3) 宇野友康, 佐藤英夫:慢性閉塞性肺疾患(chronic obstructive pulmonary disease:COPD)の認知度調査及び普及率の向上の検討。日本呼吸器学会誌。2, 5, 2013.